ホーソーン作品に見る不合理な意思決定

藤沢 徹也

1. はじめに

人間は感情で動く生き物であり、不合理な行動を選択してしまうことがある。直観で物事を判断し、その直観を後付けで合理化したり、損することがわかっていても何かと理由をつけてやめられなかったりもする。まず、不合理な意思決定に関して英語教員を例に取ると、長年授業は英文の速読から始めてうまくいっていたが、その年は学生が乗り気でなく全くうまくいかないとする。その場合、リスニングから始めるなど他の方法を試してみるのが合理的な意思決定であり、速読指導には思い入れがあるし、長年そうしてきて実績があるということで、そのまま続けていくのは不合理な意思決定だと言えるであろう。人間の感情が合理的な意思決定を阻むことがある。このようなことを研究対象としているのが行動経済学である。それは、心理学を応用して人間の意思決定を分析する学問である。伝統的な経済学が前提としているのは、超合理的に行動し、他人のことは顧みずに、自分の利益だけを追求する人である。その人は自分を完全にコントーロールし、自分の不利益になることは絶対せず、自分が有利になるためには、他人を出し抜くことに何の躊躇もない。これを、ホモエコノミクス（合理的経済人）と呼ぶ。しかし、実際の人間は自分の利益を顧みず他人のために行動することもある。伝統的な経済学では、ホモエコノミクスを前提として理論を構築するので、実際の人間の行動との乖離が生じ、うまく説明できないことがある。それに対応するために生まれたのが行動経済学である。そもそもは、経済現象や経済問題を読み解くことを意図していたが、行動経済学の知見は行政や医療など様々な分野でナッジとして活用されるようになっている。ナッジとは、強制しなくても人間の不合理な意思決定を巧みに利用して、好ましい行動に誘導することをいう。小説も作中人物が行動し感情が関係するので、作品中に不合理な意志決定が見られるのではないだろうか。本稿では、行動経済学の知見を援用し、作中人物の不合理な意思決定を中心に論じていきたい。

2. システム 1 とシステム 2

脳の働きには、深くは考えずにすぐさま答えを出す「速い思考」とよく考えて答えを出す「遅い思考」があり、ノーベル経済学賞受賞のダニエル・カーネマン（Daniel Kahneman）は前者をシステム 1、後者をシステム 2 と呼んでいる。脳がその 2 つのシステムを使い分けているのは、エネルギーの節約のためであり、その役割分担は脳の負荷を最小限にするよう効率的にできている。システム 1 は、深く考えないので、脳のエネルギーをほとんど消費しない。一方、システム 2 は熟考するので、脳のエネルギーを多く消費する。全ての判断をシステム 2 に回してしまうと、脳がすぐに消耗してしまうので、大部分をシステム 1 がさばくことでバランスを取っている。脳に入ってきた全ての情報は、システム 1 が必ず先に自動で処理するが、日常における大抵の状況は、シス

テム 1 の判断でうまくいく。一方で、システム 1 は信じやすく騙されやすいところがあるので、少なからず判断ミス（認知バイアス）を起こしてしまう。ここに不合理な意思決定が生じるひとつの要因がある。

ここで、カーネマンの『ファスト＆スロー』にも載っている有名な例を挙げたい。

バットとボールは合わせて 1 ドル 10 セントです。
バットはボールより 1 ドル高いです。
ではボールはいくらでしょう。

ボールは 10 セントと答えた人が多かったのではないだろうか。それでは、バットが 1 ドル 10 セントとなり、バットとボールの合計は 1 ドル 20 セントになってしまう。ボール 5 セントでバット 1 ドル 5 セントが正解となる。このボールの値段に関する問いで間違えてしまうのは、システム 2 でじっくり考えず、システム 1 で対応することにより起こる（カーネマン 83-84）。このように現実世界に住まう人間が、日常生活においてもシステム 1 により判断ミスをし、不合理な意思決定をすることがあっても不思議はないであろう。

3. 文学と行動経済学の接点

文学と行動経済学の接点に関しては、作家が小説を創作する際に、行動経済学の知見を利用できると言及されたものがある。『経済セミナー』という経済雑誌に、2015 年のシンポジウムの報告をまとめた「小説の中の経済学」が掲載されている。3 つあるセクションの 2 つめに掲載されている、久坂部羊の「行動経済学と小説作法」が関連する。久坂部は医師であると同時に小説家であり、医療現場を舞台とした小説などを書いている。見出しには、「行動経済学によって分析が進んでいる人間行動の癖を利用すれば、読者が面白いと感じる小説が書ける！？」とある。久坂部はカーネマンの『ファスト＆スロー』を読むと、「人間の心理や行動のすべてが行動経済学で説明できそうで、さらに、小説の読者がどうすれば面白いと感じるかのヒントも全部書いてあった」と述べている（53）。

また、久坂部は読者というものは読むとき次に挙げる 4 つの法則に陥ると指摘している。1.見たものがすべてという法則に従う。2.プライミング効果を受ける。3.もっともらしさの錯覚に陥る。4.無意識に参照点を設定する。これらさえ把握すれば誰でも面白い小説が書けるとし（55）、それぞれに具体例が示されている。例えば、1.に関して、読者は書かれていないことには類推するしかないので、作中人物にいかにも悪そうな人といい人が出てくると、まずは悪そうな人を犯人だと思う。そこで、それを逆手にとっていい人が犯人だったとすると、意外性を作ることができる（55-56）。久坂部はこのように述べているが、これは修辞法の叙述トリックと同様のものと言えるかもしれない。他の 3 つもよくある修辞法であるように思える。

本稿では、アメリカの作家ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の 3 つの作品を中心に論じていく。ホーソーンは自身の作品をノベルではなく、ロマンスだと

言っている。『緋文字』（*The Scarlet Letter*）の冒頭の「税関」で述べられるように、ロマンス作家は、「現実世界（the real world）」と「おとぎの国（the fairy-land）」のどこか中間に位置する「中間領域（the neutral territory）」を作品中に構築し、そこでは「現実的なもの（the Actual）」と「創造的なもの（the Imaginary）」が混ざり合い、その結果、幽霊が出てきてもおかしくない世界となる（Ⅰ 36）。その世界は、現実に寄り添うノベルとは異なり、作者の創作に「自由度（latitude）」がある（Ⅱ 1）。そのような物語の世界において、作中人物は人間的な不合理な意思決定をするのであろうか。

ホーソーンはアレゴリーを多く書いている。それをごく簡単に言うと、抽象概念を具体的な人物等で表したものであるが、後に論じる「ラパチーニの娘」（“Rappaccini's Daughter”）の序文で、ホーソーンは自分には深く根付いたアレゴリーへの愛があり、プロットと人物から人間的な温かみを奪い去ってしまっていると言っている（Ⅹ 91-92）。そのような人物も人間的な不合理な意思決定をするのだろうか。

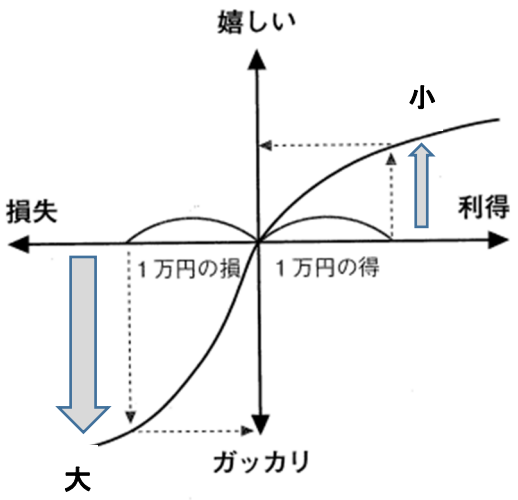
本稿では、作中人物の不合理な意思決定を指摘すると共に、それに至った原因も探っていきたい。

4. 「古い指輪」

1843 年に発表された「古い指輪」を、行動経済学のプロスペクト理論を援用して考察したい。プロスペクト理論とは、損得や確率が関係する不確実な状況で、人間がどのように意思決定するのかを説明するものである。この理論の中の価値関数と確率加重関数を援用して、分析を試みたい。

「古い指輪」は、ホーソーンと同時代のニューイングランドで、クララ・ペンバートン（Clara Pemberton）が婚約者のエドワード・キャリル（Edward Caryl）から指輪を贈られるところから始まる。クララは、その指輪の来歴について想像力を働かせて物語を作って欲しいと頼む。エドワードはできあがった物語を、クララが招待した友人数名に読み聞かせる。その内容は、エリザベス女王のものだった指輪が人間の悪行により呪いをかけられるが、めぐりめぐって教会で貧しい人の手によって献げられ、その行為により浄化されたというものである。その物語は、何の変哲もない美徳をたたえる、わかりやすいハッピーエンドの道徳物語だと言えるのだが（藤沢「古い指輪」38）、それを聞いた聴衆は絶賛する。作家が作品を道徳物語にするのであれば、ハッピーエンドでない方が、その道徳はより読者の心に響くのではないだろうか。例えば、『緋文字』がハッピーエンドであったらどうであろう。姦通を犯したアーサー・ディムズデール（Arthur Dimmesdale）とヘスター・プリン（Hester Prynne）は、森の中の密会で海外逃亡を計画するが、その後彼は民衆の前で罪を告白し、その場で息絶える。2 人がうまく逃亡してヨーロッパで幸せに暮らしたというストーリーであったら、恋愛小説としても、また、形ばかりの厳格なピューリタン社会からの脱出劇としてもハッピーエンドとなる。その場合、2 人の墓は、墓石はひとつでも、その塵は混じり合う権利がないかのように隔たりがあったと終わる原作に比べて、名作として文学史に残っていたかは確かに疑わしいであろう。

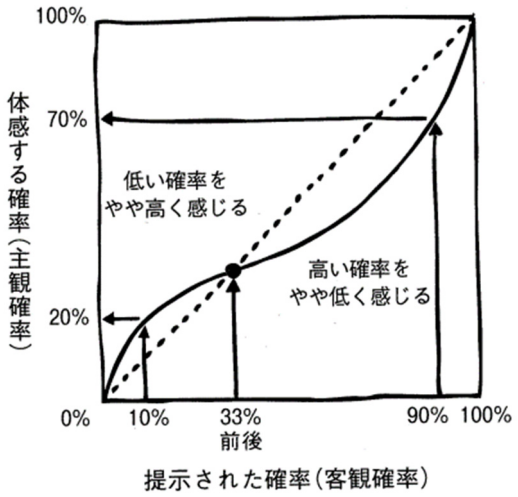
図 1-1 価値関数



情報文化研究所『情報を正しく選択するための認知バイアス事典』 高橋昌一郎監修、フォレスト出版、2021 年、p.223 より引用し一部改変

ハッピーエンドでない方が、読者の心に残りやすい原因について、価値関数の損失回避という概念から考えることができる。損失回避とは、人間には得をするより損をしたくないという気持ちの方が強いことを差す。図 1-1 は価値関数のグラフであるが、横軸は損得の客観的な価値を表し、縦軸は損得に対する感情の動きを表す。例えば、1 万円得られたときの喜びより、1 万円失った悲しみの方がはるかに大きく、それは 2 倍から 3 倍あると言われている。つまり、1 万円の損失を補うには 2 万円から 3 万円以上得ないと釣り合わないことになる。ハッピーエンドでないものと釣り合うには 2 倍から 3 倍以上のハッピーエンドの効果が必要だということになるであろう。ハッピーエンドの定番である、幸せな結婚や成功した冒険談などが、ハッピーエンドではないものと釣り合おうとすると、読者に訴えかける力が 2 倍から 3 倍必要となると言えるであろう。ホーソーンが道徳物語でありながら、軽いハッピーエンドのものを書いたのは、わかりやすい道徳を含んだ物語というだけで、ありふれた褒め言葉で激賞する聴衆の姿を浮かび上がらせ、同時代の読者をその聴衆と重ね合わせて批判するためだったのではないだろうか（藤沢「古い指輪」41）。ここでは、作者が損失回避という不合理な意思決定を利用していると言えるだろう。

図 2 確率加重関数



情報文化研究所 『情報を正しく選択するための認知バイアス事典 行動経済学・統計学・情報学 編』高橋昌一郎 監修、フォレスト出版、2022 年、p.91 より引用

教会の献金活動で、エリザベス女王の着けていた指輪が、一番安いコインや偽札を差し出すような献金にあまり熱心ではない貧しい人のグループから献げられたという話は、道徳物語としてもなかなか信じがたいのではないだろうか。しかし、それを聞いた聴衆は、このことを難なく受け入れている。これは、確率加重関数から説明できると思われる。図 2 がそのグラフであるが、横軸は客観的確率を表し、縦軸は主観的確率を表す。実線が示すように、確率 30%くらいを境にして、低い確率を実際以上に高

く見積もる傾向になり、ほぼ起こらないと思われることも起こると感じてしまう。これが、普通ではありえない非常に高価な指輪が献げられるという話に、物語を聞いた聴衆が違和感を抱かない理由のひとつになっているであろう（藤沢「古い指輪」37）。

次に、聴衆が作者のエドワードに次々と送った絶賛の言葉に注目したい。

> "Very pretty!—Beautiful!—How original!—How sweetly written!—What nature!—What imagination!—What power!—What pathos!—What <u>exquisite humor</u>!"—were the exclamations of Edward Caryl's kind and generous auditors, at the conclusion of the legend. （XI 352 下線筆者）

婚約者が物語を作るように頼み、それで作られた話の出来具合を最初から否定することはまずなく、最初の人は褒めるであろう。それが他の人の意思決定にも影響を与えていると考えられる。最初の 2 人ぐらいが絶賛したら、それ以降の人がそれを否定するのはなかなか難しいであろう。自分の意見はあるが、他の人の意見や行動に合わせてしまう行為を同調効果と呼び、紅茶がおいしい店と聞いていたので食後はそれを注文するつもりでいたが、周りがコーヒーを注文するので、それに合わせてしまうことがその実例となる。他の人がよく考えて選択しているのであればそれに従うことは合理的な意思決定だが、実生活では必ずしもそうではないことが多いと思われる。ひとりで冷静に考えればしなかった選択を、周り人の選択に追従して、その結果不合理な意思決定をするといったことが起こりうる。この現象が起こるひとつの理由が後悔回避の感情が働くことにある。自分の判断で失敗した場合は後悔の感情は大きいが、他の人の判断に乗って間違えた場合は後悔の感情はそれより小さくなる。このように後悔しない選択が優先される。エヤル・ヴィンター（Eyal Winter）によれば、人間は自分が精通しているはずの分野でも決断を下したがらない。それは、そのような分野で間違った決断を下したときの後悔を全力で避けようとするからだ（274）。

最後に発言した人の「絶妙なユーモア（exquisite humor）」という言葉に関してだが、語られた物語の中にユーモアと呼べるところはない。単に言うべき褒め言葉がなくなったので、とりあえずユーモアに関して言及したとしか思えないが（藤沢「古い指輪」39）、このことに関してさらに論考を深めたい。最後に発言した人は婚約指輪にふさわしい話として、社交辞令程度に軽く褒めておきたかったのかもしれない。しかし、どんどん他の人が絶賛していくので、冷静に考えたらそうしなかったかもしれないが、褒める要素はすべて言われてしまったので、ユーモアらしき要素はないにもかかわらず、「絶妙なユーモア」があると褒めたと考えられる。では、なぜそのような行為に至ったのだろうか。矢継ぎ早に褒め言葉が述べられ、自分の発言する番が回ってきたとき、利用可能性ヒューリスティクス、つまり、頭に思い浮かびやすいものや目立ちやすいものを優先的に頼って判断してしまうことが起こったと考えられる。物語の内容に関する一般的な褒め言葉はすでに出尽くしているので、その内容と必ずしも一致しないが、物語に対してたたえることになるユーモアについて言及したと考えられる。また、後悔回避の心理が働い

たとも考えられる。つまり、物語に対しては普通使わず、しっくりこないかもしれない褒め言葉を口にし、それが失敗することを避けたのかもしれない。さらに、物語を 1 回耳にしただけでは細部まで覚えていないだろうから、物語内にユーモアがあったはずだと都合よく解釈したこともありえる。また、周りの聴衆も恐らく物語の詳細までは覚えておらず、損失回避の感情により、ユーモアの有無についてあえて言及して間違うことを避けたり、たとえユーモアがなかったことを確信していても、異議を唱えない周りに同調したりしたのであろう。

5.『七破風の屋敷』

作中人物の意思決定について、同じくプロスペクト理論で説明できることを、『七破風の屋敷』（*The House of the Seven Gables*）の兄妹が逃亡するエピソードから考察したい。この作品は 1851 年に出版され、19 世紀のアメリカ、セイラムが舞台となっている。七破風の屋敷に年老いたペプジバー・ピンチョン（Hepzibah Pyncheon）と下宿人の若い銀板写真家のホールグレイブ（Holgrave）が住んでおり、そこに一族の娘であるフィービー・ピンチョン（Phoebe Pyncheon）がやってくる。その後、服役していたヘプジバーの兄であるクリフォード・ピンチョン（Clifford Pyncheon）が出所して戻ってくる。フィービーが一時的に実家に戻っているときに、ジャフレー・ピンチョン判事（Judge Jaffrey Pyncheon）がクリフォードから聞き出したいことがあると屋敷を尋ねてくる。ヘプジバーは何度も拒否するが、彼の脅しに折れてクリフォードを呼びに行っている間に、ピンチョン判事は椅子に座っている状態で血を吐いて亡くなる。そして、クリフォードとヘプジバーは屋敷からいなくなる。クリフォードと妹はなぜ一番疑われる行為、つまり、その場から逃げたのだろうか。また、なぜすぐ戻ってきたのだろうか。

ほとんど廃人のようであったクリフォードは、ピンチョン判事が亡くなったことを知ると興奮状態になり、ピンチョン判事を指差して笑ったりするほどであった。クリフォードは屋敷から逃れたいと思っていたが、その足かせとなっていたピンチョン判事が亡くなり、それが可能になったことがその興奮状態を引き起こしたようだ。とはいえ、ただ屋敷から遠くに行きたいのなら、クリフォード兄妹は目的地を決めることもなく、また十分な準備もしない状態で、すぐさまその場を離れる必要はなかったはずだ。これには、そうしてしまう事情があり、そこに不合理な意思決定が関わったと考えられる。クリフォードは、ピンチョン判事におじ殺しの濡れ衣を着せられ、30 年も投獄された。そのおじの亡くなっていた姿と、今回ピンチョン判事が亡くなっている姿は、椅子に座った状態で血を吐くというそっくりな状態であった。そのような状況で前回冤罪を着せられたのだから、今回もその可能性があると思い、逃げ出すことには理解できる。ホールグレイブが言うには、「クリフォードにあのような悲惨な結果をもたらした以前の死と今回のものが似ていることにうろたえ、恐怖に怯えて、2 人はこの場から立ち去ること以外に思いつかなかった」（Ⅱ 303）。逃げ出すことの危険性についてもホールグレイブの、「2 人が逃げたので、この事件が最悪の色合いを帯びてしまうんだ。そうでなくても、疑

図 1-2 価値関数

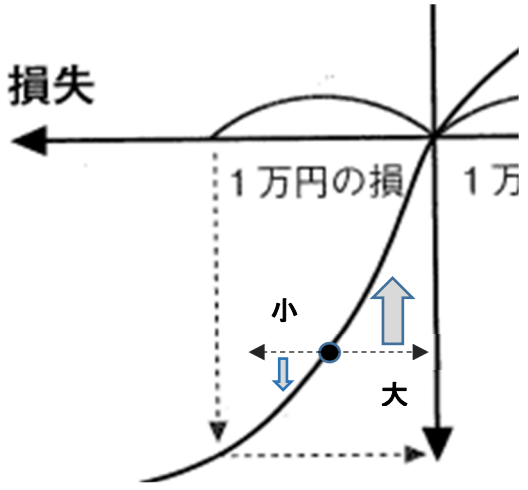


図 1-1 を一部改変

われる余地があるのにね」（Ⅱ 303）という指摘は妥当であろう。

彼らの行動はプロスペクト理論の価値関数で説明できる。図 1-2 は図 1-1 の左下の損失を表す部分を拡大したものである。損失状況では、リスクがあるとき、より大きなリスクを取ってしまうという不合理な意思決定が起こりうる。それは、リスクを冒してさらに損失を被ったときのがっかり感より、うまくいった時の喜びの方が優るからだ。賭け事に大きく負けているときほど、よりリスクを取ってしまうことがそのよい例として挙げることができる。クリフォードは、再び濡れ衣を着せられるという大きなリスクに晒されていると感じ、逃げるというリスクを取ったと思われる。しかし、これもホールグレイブが言うのだが、「ヘプジバーが悲鳴を上げていてくれたら、クリフォードがドアをバタンと開けて、ピンチョン判事が亡くなったことを声高に言ってくれていたら ····· 2 人にとってとてもよい結果をもたらす事件になっていただろう」（Ⅱ 303-04）。ピンチョン判事と 30 年前のおじの亡くなり方が同じであれば、前回ピンチョン判事が手を加えて、クリフォードに罪を着せた部分がないことを証明することができた。また、ホールグレイブがつかんでいる情報では、血を吐いて亡くなるのはピンチョン一族の遺伝的特質なので、亡くなった 2 人もそうだろうと推定することもできる。ヘプジバーはどうやら、冤罪はピンチョン判事の手によるものだったということに感づいてはいるようなので、警察の捜査にうまく協力して、無実を説明できたかもしれない。

クリフォードが屋敷を出てからは、興奮状態により自由になったことの喜びが優るあまり、冤罪を再び着せられる恐怖は忘れ去られたようだ。語り手は屋敷を出て駅に向う 2 人を、人生経験の少なさから、小銭とパンをポケットに入れて世界の果てに旅立つ子供に例えている。そもそも、2 人にとっては無謀な冒険であり、失敗に終わることが早い段階で示唆されている。車掌に行き先を聞かれたクリフォードは、行き先なんかどうでもよく、ただ楽しみ（pleasure）で乗っているだけだと答えている。また、向かいの席の老紳士に対して屋敷には戻るつもりはなく、そこから離れれば離れるほど、喜びや胸の高鳴りが増すと言っている。汽車に乗ってからのクリフォードは、その興奮状態により、その結果がどうなるかなど考えることなしに、屋敷を離れることができた嬉しさで頭がいっぱいのようだ。

興奮状態にあるクリフォードは老紳士に進歩思想について雄弁に語っている。その状態を語り手は、大人となり、知的活力はみなぎり、あるいは少なくともそれに似た状態にあったと言うが、それは「病的で一時的（both diseased and transitory）」（Ⅱ 258）

だと添えている。やがて、興奮状態が覚めると、急に汽車から降りて、結局屋敷に戻ることなり、2 人の旅は失敗に終わる。クリフォードは屋敷にいたときと変化はなく、ヘプジバーに関して、「旅はまったく失敗とはならなかった。というのは、ヘプジバーは曇った空に向って手を差し伸べ、屋敷ではしていなかったこと、つまり祈ることができたからだ」（Male 133）が、それ以上の展開はない。この作品のテーマが過去の現在への影響なので、「二人が汽車を降り立ったさみしい場所に、「七破風の家」を思わす「黒い」廃屋があり、結局彼らがどうあがいても「七破風の家」から逃れられない、つまり「過去」から逃れられないことを作者は効果的に描いている」（丹羽 191）が、その過去の重みについても、ヘプジバーの祈りを献げたわずかな変化も下車した駅での最後のほんのわずかのシーンに過ぎない。普通、行って帰ってくるという物語構造では、その該当者は何か成長して帰ってくるものだが、それらが皆無だと言ってよい。この旅の意味を考えるとなると、わざわざ汽車に乗って遠方に来たのに、なぜ急に途中下車して屋敷に戻ることになったかに注目する方が意義深いと思える。

長々と繰り広げられるクリフォードと老紳士の進歩思想に関する議論で一番大切なのは、最後の電信に関するものである。というのは、それが汽車から降りることを決めることに繋がったからだ。電信は殺人犯を探索する点にかけては素晴らしいと老紳士に言われたクリフォードは、そんなことをすれば彼らはあまりにもひどい不利益を被ることになると言ったあと、古屋敷で椅子に死人が座っていて、そこから逃げ出し汽車に乗った逃亡者について想像してみるようにと続ける。これはまったくクリフォード自身の状況と一致し、彼はその逃亡者が遠い町で汽車から降りたら、その死人の姿を見たり考えたりすることを避けるためにはるばる逃げてきたのに、その死人の噂が町中に広まっていれば、その逃亡者の居場所はないし、果てしなく不当を被ったことになると言う。クリフォードがヘプジバーと共に汽車を降りたのは、電信があるので、何をしても逃げられないことに気づいたからだと思われる。屋敷から逃れることで頭がいっぱいだった彼に、電信の存在が殺人犯にされる可能性を思い出させた。汽車から降りた後、どこに行くのかなどまったく考えておらず、ヘプジバーにどうするか相談しようと言っていたが、彼に精力と活力を与えていた「狂気じみた興奮状態（the wild effervescence of his mood）」（Ⅱ 266）が収まりもとの廃人のような状態に戻ると、彼女に今後のことは好きにするようにと全面的に依存する。世間知らずのヘプジバーにできることは、屋敷に戻ることしかないのだが、もしクリフォードの興奮状態が続いていたらどうであったろうか。

途中下車したからといって、クリフォードにとっては、また殺人犯の濡れ衣を着せられる可能性が減じたわけではない。ここで、屋敷から逃げたときのように、リスクがあるときはリスクを取りやすい不合理な意思決定をすることも考えられる。リスク状態にある時は、濡れ衣を着せられる苦痛より、うまく逃げる喜びの方が大きくなるので、行く場所やお金がなくても、リスクを取って逃げることもできたはずである。また、せっかく長距離を屋敷から旅してきたので、サンクコスト効果が働くとも考えられる。それは、今までに費やしてきた費用や時間をもったいないと感じる気持ちが、意思決定に影響を与えることを言う。クリフォード兄妹はせっかく遠くまで来たので、それまでの労

力やお金をもったいないと思い、そのまま旅を続けるという行動に出ることもありえた。屋敷から逃げることができたのは興奮状態にあったからであり、逃げることをやめたのは興奮状態が落ち着いたからである。リスクをあえて取ろうとするには、人間の中に興奮状態のような何か特別なエネルギーが必要だということであろう。

6. 「ラパチーニの娘」

完全合理的思考のホモエコノミクスと不合理な意思決定もする人間の関係を、1844 年に発表された「ラパチーニの娘」から考察したい。この作品は非常に複雑で曖昧であると評されている。2 つの相互依存的な物語から構成され、一方が若い男女の話で、もう一方が 2 人の学者の抗争であり、前者が後者に織り込まれている（Martin 87）。今回は前者、つまり、若い男女の話に焦点を絞って議論したい。

主要な登場人物は、ベアトリーチェ・ラパチーニ（Beatrice Rappaccini）と彼女の恋人となるジョバンニ・ガスコンティ（Giovanni Guasconti）、そしてその女性の父親である、ジャコモ・ラパチーニ博士（Dr. Giacomo Rappaccini）の 3 人である。ラパチーニ博士は、娘のベアトリーチェをどんな敵にも対抗できるように植物の毒に侵された毒人間にし、その恋人のジョバンニも彼女と交際する内に同様になってしまう。最後、ベアトリーチェは解毒剤を飲むが、そこで命が絶えてしまうというストーリーである。ラパチーニ博士について、世間では次のように言われている。

> ... he [Dr. Rappaccini] cares infinitely more for science than for mankind. His patients are interesting to him only as subjects for some new experiment. He would sacrifice human life, his own among the rest, or whatever else was dearest to him, for the sake of adding so much as a grain of mustard seed to the great heap of his accumulated knowledge.（X 99-100）

患者は実験材料で、人間の命を犠牲にしてでも、ほんの小さな知識を得ようとするという。自分の思いを成就させるためなら、他の人の気持ちも何も関係なく、自分にとって合理的な考えをする、まさにホモエコノミクスと言えるであろう。

博士は自分の娘を毒性植物の生えている庭園の世話をさせることなどにより、毒を吐くような人間に作り変えていったようだ。自分自身が危険だと判断すると、毒性植物には手を触れず娘に世話をさせている。自分の娘さえ実験材料にしてしまい、直接手を下すことはないが、娘の恋人であるジョバンニにも同様の運命を歩ませている。娘に「なぜこんな惨めな運命を子供に与えたのですか」（X 127）と問いただされたとき、以下のように反応する。

> “Miserable!” exclaimed Rappaccini. “What mean you, foolish girl? Dost thou deem it misery to be endowed with marvellous gifts against which no power nor strength could avail an enemy? Misery, to be able to quell the mightiest with a breath? Misery, to be as terrible as thou art beautiful? Wouldst thou, then, have

preferred the condition of a weak woman, exposed to all evil and capable of none?”（X 127）

娘がかわいいから、娘を守るために心を鬼にして、毒人間にしたわけではないようだ。また、自分の実験のために自分の娘を毒人間にすることに対する後ろめたさゆえの言い訳でもないようだ。ホモエコノミクスのラパチーニ博士にとって、娘が毒の力で何よりも強い人間になることが合理的判断であり、本気でそのように思っていると考えられる。なぜなら、博士にとって、人間的な感情や他の人との交流など一切関係ないからだ。

一方、ベアトリーチェはというと、体は毒に侵されているけれども、心は神聖だとされ、恋人のジョバンニは彼女の表面的なことしか見ることができず、自分が毒人間になったとき、彼女に暴言を吐いて傷つける利己的で下劣な男と非難される。ベアトリーチェのジョバンニに対する、「はじめからあなたの人間性（nature）には、私よりも多くの毒があったのではありませんか？」（X 127）という言葉で、彼女は天使でジョバンニは俗物というポジションが決まってしまうようだ。

ところで、彼女は本当に心は神聖なのだろうか。以前、自身の論文で、ベアトリーチェは恋人と一緒にいると、彼は毒人間になることに気づいていたがそのままにしていたダークな面があること（藤沢「ラパチーニ」 48-49）、また、多くの読者は語り手の提示する道徳に従って、ベアトリーチェのその面に目を向けないことを論じた（藤沢「ラパチーニ」 49-51）。この点について、行動経済学の知見を援用し、さらに論考を深めたい。

ベアトリーチェは、庭園で彼といっしょに過ごしたら、彼も自分と同様に毒人間になることに明らかに気づいていた。ラパチーニ博士は庭で作業をするときはマスクなど完全防備をしているのに対し、ベアトリーチェはジョバンニには全くそんなことを求めていない。物語のクライマックスで、ジョバンニの吹く息により、虫が死んでしまうのを見たベアトリーチェは、すぐさま父親に責任転嫁し、自分のせいでないことを強調して、父親が 2 人を結びつけたと言う。フレデリック・クルーズ（Frederick C. Crews）は「この自己正当化は ····· ベアトリーチェは一度もジョバンニは自分から感染するかもしれないということを考えたことがないというほとんど信じられない事実に基づく」（119-20）と述べている。もしそのことを本当に知らなかったのであれば、ジョバンニの息で虫が死ぬのを目にした直後は、普通であれば状況をよく把握できずに言葉を失うのではないだろうか。しかし、すぐさま父親のせいだと断言できたのは、2 人で毒性植物の生えている庭園で過ごすと、ジョバンニも毒人間になることに気づいていた証左となろう。また、「私を足蹴り（spurn）にして! ― 踏みつけて!― 殺して!」（X 125）と、即座に発せられる過激な言葉は、ジョバンニを毒人間にしてしまったのは自分であることから目を背けるために発せられたものではなかろうか（藤沢「ラパチーニ」48-49）。

しかしその一方で、ジョバンニが毒性植物に触ろうとしたとき、ベアトリーチェは彼の手を取って引き戻し、命に関わるから絶対触ってはいけないと叫んでいる。その叫びは、「苦悩に満ちた声（a voice of agony）」（X 114）だと表現されており、その後、顔を隠しながら彼の元から逃げ出していることからも、彼女は彼のことを大事に思っている

と同時に、自分の毒人間としての立場を理解していることが見て取れる。ベアトリーチェは、自分の欲求を満たすためだけにジョバンニと親交を結んではいない。つまり、彼女は極めて人間的であり、ホモエコノミクスではなかったことになる。

ベアトリーチェの人間的な合理的判断は、ジョバンニを自分に近づけないことだったはずだ。本当に彼のことを大切に思い、愛しているのであれば、恋人であることをやめることが一番合理的である。また、ジョバンニが毒人間になったことが露見したとき、自分の過ちを素直に認めて謝っていれば、庭園で共に暮らしていくことができたかもしれない。ベアトリーチェは、望ましくない状況にあることを認められない状態、つまり認知的不協和にあったと言えよう。このようなときは、自分に都合の悪い情報は無意識に避ける傾向にある。イソップ童話の「酸っぱい葡萄」がよく例に出される。狐は葡萄を食べたいけれどそれに届かず、自分を納得させるために、葡萄は酸っぱいに違いないと思う。ベアトリーチェは死ぬ前に「怖がられるより、愛されたかった」（X 127）と口にするように、恋人同士であることを優先し、ジョバンニを毒人間にすることから目を背けていたようだ。言い換えれば、感情で動く人間的な姿とも言える。ジョバンニは手に入れた解毒剤をベアトリーチェといっしょに飲もうと提案するが、彼女は自分が先に飲むから、その結果を待つように言う。彼女は何かよからぬことを察したのであろう。2人の関係が険悪になっていたので、よりリスクを取ったと言える。リスクの大きいときは、よりリスクを取りやすいという人間的な不合理な意思決定がここでも起こっている。

確かに語り手はベアトリーチェを地上の天使と持ち上げるが、不合理な意思決定をし続けたベアトリーチェの人間的な面に読者は目を向けないのであろうか。この物語の最初に序文がついていて、この作品はアレゴリーだと宣言される。それには通例教訓がつき、この作品も教訓として「目で見たり、指で触れることができるもの以上に、より真実のものやよりリアルのものがある」（X 120）と述べられる。このように、外見は毒で侵されていても心の中は神聖なのがベアトリーチェであると語り手により断言される。ベアトリーチェの心が神聖であるところは特に具体的に示されていないにもかかわらず、多くの読者はアレゴリーとしてだけ受け止め、ベアトーチェの神聖さを受け入れるようだ。過去にうまくいった行動を繰り返すことを習慣化と言うが、読者は明示された教訓を盲信しているのではないだろうか。読者が一方的に毒人間にされたジョバンニの心など返りみることはほとんどないようだ。ホモエコノミクスのラパチーニ博士と、感情で不合理な意思決定をする非常に人間的なベアトリーチェが対比されているが、実は多くの読者は後者に目が行かない不合理な意思決定をしているのかもしれない。

7. おわりに

これまで見てきたように、作中人物はもちろん、多くの読者もテクストを読む際に不合理な意思決定をしているようだ。作中人物は、たとえそれがアレゴリーの中の抽象概念を具現化する人物であっても、人間的な不合理な意思決定をしていた。ラパチーニ博士は、ホーソーン文学の中で、「許されざる罪」を犯した人物、つまり、高慢から知性と情の均衡を崩し、知性を満たすことに終始するあまり、情が枯渇してしまった人物のひ

とりである。超合理的な人物であるホモエコノミクスは、小説の中でも特異な存在と言えるだろう。本稿では、損失回避、後悔回避、認知的不協和などの作中人物の不合理な意思決定を中心に論じてきたが、作者が創作において不合理な意思決定をいかに扱っているかについてはほとんど言及できなかった。

読者はいったん読みの方向性、例えばこの作品は道徳物語であるとか、教養小説であるとか決めて読み進めていくと、それ以外の読みに目を向けず、様々なことを読み落とすことがあるように思える。これはあえて新たな読みを試みた際に、それがうまくいかず、損をしてしまうのを避けることが原因となる現状維持バイアスから生じる。作者は読者をそのように誘導しておいて、行間やその裏で表だっては言えないテーマを巧みに隠している可能性もある。『緋文字』で、語り手はディムズデールの胸の A の文字が現れた理由についての意見を 3 つ、そして、そんなものはなかったという意見をひとつ紹介する。人間が物事を選択するとき、選択肢が多すぎると選択できなくなったり、極端なものは避けたりする傾向がある。作者が様々な解釈を提示しながらも、読者の選択を操っている可能性もある。今後は、文学の中の不合理な意思決定を元に、新に見えてくることを分析していきたい。

注 1 本稿は第 44 回 岡山英文学会 大会（2022 年 10 月 1 日（土））での発表、「小説をめぐる不合理な意思決定」に、加筆、修正したものである。

Works Cited

Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes.* U of California P, 1989.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. 23 vols. Ohio State UP, 1962-97.（ホーソーンの作品に言及するときはこの全集による。引用の際には巻数とページ数を明示する。）

Male, Roy R. *Hawthorne's Tragic Vision.* U of Texas P, 1957.

Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne.* rev. ed., Twayne Publishers, 1983.

ヴィンター、エヤル 『愛と怒りの行動経済学 ―賢い人は感情で決める―』青木創 訳、早川書房、2017 年。

カーネマン、ダニエル 『ファスト&スロー ―あなたの意思はどのように決まるか? ―（上）』村井章子 訳、早川ノンフィクション文庫、2014 年。

久坂部羊「行動経済学と小説作法 ―小説の中の経済学（2）―」 『経済セミナー』 no. 688、2・3 月号、日本評論社、2016 年、pp. 53-61。

丹羽隆昭 『恐怖の自画像 ―ホーソーンと「許されざる罪」―』英宝社、2000 年。

藤沢徹也「「古い指輪」における作中人物の「伝説」への反応 ―賞賛と不満の真意―」 *Persica* 第 49 号、2022 年、pp. 31-42。

― ― ― 「「ラパチーニの娘」における語り手と読者 ―ベアトリーチェは悲劇のヒロインなのか―」『ホーソーン研究』創刊号、2014 年、pp. 41-52。